

平安後期物語から見る大津皇子の物語の展開

本橋 裕美

はじめに

折口信夫は『死者の書』の中で、死者として姉の歌を聴く大津皇子を描いた。

を、さうだ。伊勢の国に居られる貴い巫女——おれの姉御。あのお人が、おれを呼び活けに来てゐる。(中略)

うつそみの人なる我や。明日よりは、二上山を愛兄弟と

思はむ

誄歌が聞えて来たのだ。姉御があきらめないで、も一つつぎ足して、歌ってくれたのだ。其で知つたのは、おれの墓と言ふものが、二上山の上にある、と言ふことだ。／よい姉御だつた。^①

後述するように、大津皇子は『日本書紀』や『古今和歌集』真名序の言説を通じ、日本の詩賦の始祖として古代社会の中に存在を留めていた。更に、『万葉集』の中にも、詠み手として、また題材として大津皇子は存在している。石川郎女をめぐる草壁皇子との三角関係や大津皇子の死を悼む人々の思いは歌として『万葉集』に遺され、悲運の皇子の物語を形作ってきた。中

でも、大津皇子の姉・大伯皇女の歌は、伊勢神宮への奉仕者という立場ながら、弟との深い結びつきと哀しみが詠まれ、当人の歌以上に大津皇子の苦悩を喚起させる。

本稿で試みたいのは、この大津皇子をめぐる物語的想像力に、どのような可能性があったかを検討することである。大津皇子に関わる一連の歌や言説は、大津皇子について語らねばならないという欲望、あるいは必要に迫られており、現代の我々もまた折口と同じように大津皇子の物語を想像し続けている^②。本稿では、平安時代に語られた大津皇子の物語の断片を手掛かりに、特に同母姉・大伯皇女との関係を中心に検討する。平安の仮名文学の空間から視線を投げかけ、大津皇子をめぐる物語の可能性を探ってみたい。

一、平安後期物語に見る「大津の王子」

平安時代の人々が、大津皇子について何を語り、物語化したかは明らかでない。もちろん、『日本書紀』をはじめとするいくつかのテキスト——それらは平安時代において極めて信頼度の高いテキストである——によって、大津皇子が知られていた

ことは確かである。だが、そうした歴史の一端としての人物評を超えたところで、大津皇子をめぐる物語が作られ、享受されていた可能性がある。『狭衣物語』の一節を引用する。

いとかばかりの心ならば、世にあるべうも思えぬを、我ながら慰め侘び給て、①大津の王子の心の中をさへ推し量り給て、②秋の月（または「神の調」）は、程なくこそ慰め給つれ、これは、御命の限りにさへあれば、「生ける我身」と言ひ顔なる行末は、例だになきに思こがれ給はむ。

（巻二 一九八）

『狭衣物語』の主人公・狭衣大将は、慕い続ける従妹の源氏の宮が齋院となったことに対して「大津の王子の心の中」と比較しながら自身の恋の行く末を憂う。この「おほつての王し」（以下、物語名として「大津の王子」を用いる）について、『日本古典文学集成狭衣物語』（新潮社）の頭注は次のように述べる。

「大津の皇子」は、散逸物語の名であり、主人公の名でもあろう。悲劇の皇子大津の皇子の短い生涯を物語化したものか。皇子は、天武帝の御子、帝の崩御の後、謀反の罪で死を賜ったが、一日姉の大伯皇女に逢いたいと伊勢に下り、姉齋宮と再会、涙の別れをしたことは『万葉集』の贈答で名高い。その場面が『狭衣物語』の本文に関連するらしい。「秋の月」は不詳だが、あるいは大津の皇子が秋の月を仰いで姉齋宮を恋うる場面などが『大津の皇子物語』にあつたものか。

平安時代に作られ、散逸した物語は多い。ここでの「大津の王子」もまた、歳月の中で失われた物語の一つであろう。『古

今和歌集』真名序は大津皇子について次のように語る。

自大津皇子之。初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字。化我日域之俗。民業一改。和歌漸衰。（大津皇子の初めて詩賦を作りしより、詞人才子、風を慕ひ塵に継ぐ。かの漢家の字を移して我が日域の俗と化す。民業一たび改りて、和歌漸く衰へたり。）

こうした伝承が読まれていた時代に、『狭衣物語』に引かれた「大津の王子」が、歴史上の大津皇子と無関係であったとは考えがたい。『狭衣物語』に先行する時期に、大津皇子に関する仮名の物語があつたのである。

「大津の王子」物語の内容の検討の前に、同じく平安後期物語である『浜松中納言物語』にも次のような一文があることを示しておく。

木丁をしやり給へれば、（中略）かかれる髪のかんざしよりして、言ふ限りなふ清げにかほるばかりに、にほひのいみじうつくしげなるほど、「おほえの皇子のむすめの王女、秋の月によそへられけんは、かうこそありけめ」と、たをたをとやはらかに、なまめかしはしきもてなしなど、さまざまでたしと見えつる御有さまどもにもをとらず、いみじう目もおどろかれぬるを、（略）（巻四 三七〇）

本文に大きな揺れがあるが、石川徹氏が「まず間違ひなく、『大津の王子物語』の同一場面をさす」とし、また小島雪子氏が「大津の姉であり、伊勢の齋宮でもある大伯皇女との、または大津と恋の歌を交わしながら草壁皇子が心を寄せていたことが知られる石川郎女をも併せたような女性との恋の物語であつ

たのかもしれない。」と想定するように、『狭衣物語』に登場した「大津の王子」と同様の物語があったと考えられる。この場面は、主人公である中納言が、唐後の異母妹である吉野姫を見てその美しさを評するところであるが、『狭衣物語』と「秋の月」という表現が一致する。後述するが、女性を「秋の月によそへ」る例は、平安時代の物語文学を見渡しても珍しい。だからこそ、同時代の読み手が共有できる著名な場面であったことが窺える。

平安後期物語の世界で一定の評価を得ながら消えてしまった「大津の王子」はどのような物語だったのだろうか。また、平安の人々にとっても歴史的人物であり、謀反という重大事を背景に持つ大津皇子は、どのような物語の中に存在することが可能であったのだろうか。

二、狭衣大将の恋

改めて、『狭衣物語』が「大津の王子」を用いて思いを述べる場面を分析したい。先掲の引用箇所は、狭衣大将に寄り添って、齋院になった源氏の宮への断ちがたい恋情を語っている。「大津の王子」では、王子の心は「程なくこそ慰め」られるが、対する狭衣大将の恋（「これは」と比較的に焦点化される）は、「御命の限りにさへあれば」どうしようもないと苦しむという文脈である。妹背のように育ち、今は齋院になってしまった源氏の宮への恋情と対比されるのであるから、やはり「大津の王子」もまた何らかの叶わない恋に悩んでいたことが想定でき、更に狭衣大将がどこまでも恋の叶わなさに苦しむのに対し、「大津

の王子」の恋は「慰め」を得ていることが注目される。「秋の月」は、程なくこそ慰め給つれ」の本文を採るとすれば、『浜松中納言物語』で用いられたように「秋の月」は女の喩であろう。「秋の月（によそえられる女）」は、程なく（大津の王子の心）を「お慰めになったが」と解せるのである。あるいは、「大津の王子の（秋の月（への恋）」は、程なく（王子が自分で）慰めなされたが」という解釈もあろうが、やはり「程なく」慰められる恋と、「命の限り」慰むことのない恋が対比されていることは事実で、狭衣大将に諦めるという選択肢があるならば想定されることのない時間的制限を見ることができ、「大津の王子の心の中さへ」という言い回しからも、大津の王子の恋が軽いものであったとは考えにくい。狭衣大将の恋心に匹敵する辛い恋であり、しかも諦めでないかたちで慰めを得た物語であったと解すべきだろう。

狭衣大将と源氏の宮の関係は、本来、恋愛に支障のない従兄妹であるが、両親を始めとする周囲の人々に「一つ妹背」と規定されたことよって、狭衣大将は彼女に強引に迫ることができないでいる。恋情を仄めかすことはあるものの、源氏の宮に入内の話が持ち上がった後も手を拱いていたところに、賀茂神の託宣による齋院卜定が決まり、入内回避に安堵しつつ、新たな障害が生まれたことに葛藤しているのが当場面である。齋院と妹背という二つながらの障害が「大津の王子」の連想を引き寄せたとすれば、そこに登場すべきヒロインもまた神域と妹背と、二つの禁忌を抱えている。「秋の月」によそえられた女性性は、やはり大伯皇女をイメージして造型された、王子の姉妹（ある

いは姉妹相当にして神域にある女性と見たい。大津皇子の恋はこの女性によって慰められたのである。

狭衣大将の恋の様相をもう少し確認していききたい。新たに生じた障害である源氏の宮の齋院卜定をめぐっては、賀茂の神自身の意向が強く働いている。

殿の御夢にも、賀茂よりとて、禰宜と思しき人参りて、神にさしたる文を源氏の宮の御方に参らするを、我もあけて御覽すれば、

「賀茂神 神代より標引き結ひし榊葉を我より前に誰か折るべきよし心見よ。さてはいと便なかりな」と、たしかに書かれたりと、見給ひて、驚き給へる心地、いと恐ろしう思されて、母宮・大将などに語り聞えさせ給へば、聞き給心地、なかな

な心安うぞなり給ぬる。(一九四)

源氏の宮の保護者である堀川の大殿(狭衣大将の父)の夢に、源氏の宮を齋院として奉るよう要求する賀茂の神の歌が届く。この話を聞いた狭衣大将は、内心、傍線部「なかな心安う」と受け止める。源氏の宮が入内してしまう事態よりも、齋院として困り込まれる方が都合が良いと彼は思うのである。源氏の宮自身にも、次のように今まで抑制してきた自分を主張する。

過ぎにし方、悔しきをも、え忍び給はで、

「狭衣 神垣や榊柴がくれ忍べばぞ木綿をもかくる賀茂の瑞垣「さりととも、思し召し知るらん」とこそ思つるを。浅ましかりける御心ばへにこそ、身もいたづらになり侍りぬべけれ」とて、せきもやらぬ涙に、「何故か、いたづらにもな

り給はん。いとど恐ろしうわりなし」と、思して、うち泣き給へるけわひなどの近まざりする、いとど、来し方・行末のたどりも失せて、(一九七—一九八)

傍線部の歌が吐露しているように、狭衣大将にとつて、源氏の宮は本来いつでも自分のものになった存在である。決して結ばれないと自己規定しつつ、一方で常に所有可能であったという矛盾は、狭衣大将自身の意志を超えたものとして意識される。当場面周辺には、齋院を決定する確かな夢告げのほかにも神の意向に関する言葉が散見され、特に狭衣大将は、自分の行動を見る神を感じざるを得ない。

「光るとはこれを言ふにや」と、見えさせ給も、「神は、いかが、見放ち聞へさせ給はん」と見ゆれば、まいて、大将の御心の中、ことほり也。(一九九—二〇〇)

やがて、げに、神の、狂はし給にや、思ひもあえず、暗き紛れに、あまた立てたる几帳に紛れ寄りて、御衣の裾を引きとどめ給へり。(二〇〇)

「:つらう、くちをしき心の中をば、神いかに御覽すらん。かくのみ思えんは、我身はかばかしきことあらじかし」と、身づからだにことほりに思されて、いと物恐ろし。(二〇一—二〇三)

二人の間には神が介在していることを、狭衣大将は意識する。神に憚つて世を憐むこともあれば、こうして恋情が抑えきれない状況もまた神の意向かもしれないと思ひ直す。源氏の宮をめぐって起きる矛盾した思いや行動を神に預けてしまう認識ではあろう。(二〇一—二〇三)

齋院卜定から渡御を描く当局面で、神に譲ってしまったという思いと、神の意向があったから結ばれなかったという思いと、狭衣大将は二方面に葛藤している。「一つ妹背」であるから手が出せないという物語冒頭以来の葛藤は、神域という新たな禁忌を加えて複雑に展開してしまつたといえよう。だが、この妹背と神域の禁忌が「大津の王子」と狭衣大将を隣接させたのである。

三、大伯皇女と兄妹婚

狭衣大将と大津皇子を繋ぐものを、妹背と神域という二重の禁忌への恋と仮定した時、問題となるのはやはり大津皇子がその禁忌を乗り越えて「慰め」を得たという点だろう。狭衣大将には乗り越えられず、大津皇子だけが禁忌の先に歩を進めたとするならば、その原動力は何だろうか。先に結論めいたことを述べてしまえば、そこには「秋の月」が大津の王子を「慰め給」という主体的な行為、ヒロインの意志があつたと考えたい。

大津皇子と関わつた女性として、大伯皇女のほか、石川郎女や妻であつた山辺皇女が挙げられる。特に石川郎女については、草壁皇子との確執が謀反の原因となつたとも読めるような歌が載せられており、十分に物語性を有する。一方の大伯皇女は、大津皇子との贈答がない。

大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女の作らず歌二首

吾がせこを 倭へ遣ると さ夜ふけて 鶏鳴露に 吾が立ちぬれし

二人行けど 去き過ぎ難き 秋山を いかにか君が 独り越ゆらむ
〔万葉集〕卷二 一〇五一—一〇六

大津皇子の薨せし後に、大伯皇女、伊勢の齋宮より京に上る時に作らず歌二首

神風の 伊勢の国にも あらましを なにしか来けむ 君もあらなくに

見まく欲り 吾がする君も あらなくに なにしか来けむ馬疲るるに
〔万葉集〕卷二 一六三一—一六四

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷して作らず歌二首

うつそみの 人なる吾や 明日よりは 二上山を 弟と吾が見む

磯のうへに 生ふるあしびを 手折らめど 視すべき君が在りといはなくに

右の一首は、今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢神宮より京に還る時に、路の上の花を見て、感傷哀咽して、この歌を作れるか。
〔万葉集〕卷二 一六五一—一六六

右の三歌群六首が大伯皇女の全作歌であるが、全ての題詞が「大津皇子」で始まり、テーマも思いも一貫している。多用される「吾」と「君」が、姉弟の結びつきの強さを表しているよう。大伯皇女の歌は、大津皇子自身の歌よりも如実に彼の無念の生涯を映し出すのである。題詞は「伊勢神宮」「伊勢の齋宮」という大伯皇女の立場も主張する。最後の歌群の左注が「伊勢神宮より京に還る時」の大伯皇女を幻視するように、姉齋宮が悲

運の弟皇子を恋う姿は既にイメージを形成している。個々の歌ではなく立ち上るイメージとして、大伯皇女は「弟のために詠う齋宮」なのだ。大伯皇女が「大津の王子」のヒロインであるとするれば、それは彼女が『万葉集』の中で主体的に語り、思いを表明した人物として存在し、形成されていったイメージに依るのではないだろうか。

大伯皇女の歌を解する上で見え隠れする兄妹婚については、古代文学の中で数多く描かれている。同母兄妹の強い結びつきとしての狭穂彦とその妹皇后の物語や、罪と認識しながら同母妹を妻とした軽皇子とその妹軽大娘などが挙げられる。しかし、平安時代の物語については、兄妹婚は倒錯的にしか登場しない。『狭衣物語』がまさに兄妹婚の変形であり、本来は従妹であるのに、兄妹のように育てられたから婚姻は結べないと考えるのである。平安時代の物語で兄妹婚の禁忌を犯すところまで描いたのは、『篁物語』くらいであろう。

『篁物語』では、同母兄妹でこそないが、兄と妹の恋が語られる。異母兄妹の恋がどこまで禁忌であったかという社会的位置づけは断定しがたいが、遅くとも平安中期には禁じられたものであった。『篁物語』の主人公・小野篁は、宮仕えのために習い事をする異母妹に、書を教えるように頼まれ、親しくなるうちに恋心を抱くようになる。妹の反応は、始めこそ次のようにつれなく返しているが、徐々に変化していく。

なかにゆく吉野の河はあせななん妹背の山を越えて見
るべく

とありければ、「かかりける」と心づかいしけれど、「なさ

けなくやは」とて、

妹背山かげだに見えてやみぬべく吉野の河は濁れとぞ
思ふ (二五)

歌としては拒否のかたちを取るが、男女関係にも反転しうる「妹背」という言葉をすでに用いており、以後も贈答が続く。二人の関係はなかなか進展しないが、結局、親の目を盗み、篁は妹と結びつく。関係を持つ直前の詠は次のようなものである。

目まに近く見るかかいもなく思ふとも心こをほかにやらばつ
らしな

と言ひければ、「人の御心も知らずや。」

妹まあはれとは君きみばかりをぞ思ふらんやるかたもなき心と
をを知しれ

思ひくさなや」と言ひければ、少し心ゆきて、

誰たれいどどしく君きみが嘆なげきのここがるればやらぬ思ひも燃えま
さりけり (三〇—三二)

ここで確認したいのは、妹が、篁に対してきちんと応答している点である。成就しない兄妹婚の代表である『うつほ物語』のあて宮求婚譚における仲澄侍従などは、妹・あて宮から返信をもらうことなどほとんどない。『狭衣物語』における源氏の宮も、狭衣大将の恋情には沈黙で応えることが多く、恋する兄に拒否する妹という関わり方が読み取れる。内容が拒否であっても、歌を返してしまうこと自体が危険を伴っており、妹たちは不幸しか待っていない禁忌に参加することを拒んで詠み手にならないのである。

平安後期物語の段階で、兄妹婚は禁忌としては残っているも

の、乗り越える可能性の極めて低いものでしかなく、むしろ兄妹に見立てられた男女の間にこそ緊張を伴って語られるものであったと考えられる。かつては許されていた異母兄妹の婚姻が忌避されるようになる時代背景もあるが、兄妹婚の禁忌が犯した者たちの死によって清算される、過剰なものとして描かれたことが大きな理由ではないか。狭穂彦や軽皇子は妹とともに死に、篁の妹は兄の子を宿したまま死ぬ。あて宮以後の、兄を拒否する妹たちは、そうした兄妹婚の不幸をなぞらない。仲澄だけが独り恋死する。兄妹婚の場合、不本意な結びつきが顕れないのも特徴だろう。兄妹婚の禁忌を犯すのは二人の問題であり、一方だけが恋情を募らせるような関わり方は恋として成就しない。だからこそ、あて宮も源氏の宮も拒否によって片恋で終わらせることができるのである。

兄妹婚の禁忌は、いくつかの悲恋を抱え込みながら、乗り越え得ないものとして平安後期物語に描かれている。「大津の王子」がそうした物語の潮流を乗り越えるとすれば、歌を詠むという行為を通じて主体的に弟と関わる『万葉集』の大伯皇女の姿が反映されている可能性は高い。そして、大伯皇女の面影を背負うということは、その背景をも（平安の人々にとつての）古代へと遡らせることになる。大津の王子を「慰め給」ヒロインである「秋の月」は、王子の恋情を受け容れる意志と、それが起きても許される時代性を背負って物語を展開させたと考えられる。

四、「秋の月」と大伯皇女

ここまで、大伯皇女の歌に見られる愛着から、兄妹婚の禁忌を犯す足がかりとしての、女の在り方を確認した。以下、まとめておきたい。平安中期以後の物語において、兄妹婚は女が反応しないことで戯れのまま、あるいは片恋のまま終わる。数少ない肉体的に結ばれた兄妹婚の例として『篁物語』が挙げられるが、『篁物語』は兄と妹の間に十分な交流が行われており、女が拒否するという他の物語の在り方とは異なっている。妹の死によって犯された禁忌は清算されるが、死んだのちも妹は魂となつて篁に思いを伝えるのであり、兄妹婚が男による一方的な犯しではなく、二人のものとして顕れていることがわかる。こうした兄妹婚の系譜からいえば、大伯皇女の歌は常に大津皇子に向けて詠まれており、二人の関係をどこまで密通として読めるかという点を差し引いても、二人の物語として成立する素地があることは指摘できる。

しかし、「大津の王子」における禁忌は、妹背だけでなく、神域の問題も含んでいた。兄妹婚の物語が喚起される大伯皇女の詠いぶりに加えて、彼女が齋宮であるという点も考えていきたい。ここでも、主体的に関わる女の在り方は有効なように思われる。

齋宮の恋を作り上げ、人口に膾炙させたのは、やはり『伊勢物語』狩の使章段である。『古今和歌集』にも類歌の載る次の段は、伊勢在任中の齋宮と密通した点で極めて特徴的である。

むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、親の言なりけ

れば、いとねむごろにいたはりけり。(中略)二日といふ夜、男、われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ざねとある人なれば、遠くも宿さず。女のねや近くありければ、女人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。(中略)明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てか
さめてか

男、いといたう泣きてよめる、
かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ

とよみてやりて、狩にいでぬ。(中略)取りて見れば、
かち人の渡れど濡れぬえにしあれば
と書きて未はなし。その盃のさらに統松の炭して、歌の末を書きつぐ。

またあふ坂の関はこえなむ
とて、明くれば尾張の国へこえにけり。齋宮は水の尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹。

〔伊勢物語〕六九段 一七二—一七四

ここでの齋宮は、男と逢うことを自ら選択し、自らやってくる。逢瀬は一夜限りであるが、歌を詠みかけるのも齋宮であり、男が自由に動くことはできない。齋宮と密通については、『日本書紀』にいくつかの記事が散見され、侵犯される可能性を抱えた禁忌として描かれてきたが、狩の使章段では、周囲に憚るという点で禁忌としての認識はあるが、一方で傍線部「いとあ

はじとも思へらず」と語られるように、齋宮自身はその禁忌を乗り越えることができる。そしてこの密通は、男が去って行くという以上の悲恋を描かない。『日本書紀』で語られてきたような密通者への処罰や、死や出家を伴うような不幸を呼び込まない。歌語りである『伊勢物語』の性質による面も大きいが、狩の使という役職を離れられない男では、齋宮の禁忌に真に触れることがないからではないか。

改めて、『日本書紀』の齋宮の密通記事を見てみたい。

三年の夏四月に、阿閉臣国見、更の名は磯特牛。櫛幡皇女と湯人の廬城部連武彦とを諧ちて曰く、「武彦、皇女を汗しまつりて、任身しめたり」といふ。湯人、此には史衡といふ。武彦が父枳莒噲、此の流言を聞きて、禍の身に及らむことを恐り、武彦を廬城河に誘へ率て、偽きて使鷓鴣没水捕魚して、因りて其の不意に打ち殺しつ。(中略)虹の起てる処を掘りて、神鏡を獲、移行くこと遠からずして、皇女の屍を得たり。割きて観るに、腹中に物有りて水の如く、水中に石有り。枳莒噲、斯に由りて、子の罪を雪むること得たり。

〔日本書紀〕卷第一四 雄略天皇②一五七—一五九

二年の春三月に、五妃を納れたまふ。(中略)次に蘇我大臣稲目宿禰が女は堅塩媛と曰ふ。堅塩、此には岐拖志と云。七男六女を生む。其の一を大兄皇子と曰し、是は橘豊日尊とす。其の二を磐隈皇女と曰す。更の名は夢皇女。初め伊勢大神に侍へ祀る。後に皇子茨城に奸されたるに坐りて解かる。(中略)次に堅塩媛の同母弟は小姉君と曰ふ。四男一

女を生む。其の一を茨城皇子と曰し、其の二を葛城皇子と曰し、其の三を埴部穴穂部皇女と曰し、其の四を埴部穴穂部皇子と曰し、更の名は天香子皇子。

〔日本書紀〕卷第一九 欽明天皇②三三三—三三六七
七年の春三月の戊辰の朔にして壬申に、菟道皇女を以ちて、伊勢の祠に侍らしむ。即ち池辺皇子に奸されぬ。事顕れて解く。
〔日本書紀〕卷第二〇 敏達天皇②四七七

雄略朝の密通事件は冤罪であり、また相手も湯人という低い身分であるが、そのほかの欽明朝と敏達朝の齋宮がそれぞれ皇子と呼ばれる相手に密通されている点は重要である。齋宮の密通の危険性は、臣下の男ではなく、天皇に代わって神の恩恵を受けるかもしれない皇子が相手であるからこそ高まる。

「大津の王子」のヒロインが齋宮であったとすれば、「秋の月」という呼称により深い意味を見出すことも可能だろう。歌語としての「秋の月」について渡部泰明氏は次のようにまとめている。

『古今集』では、「白雲にはねうちかはし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月」（秋上・一九一・よみ人しらず）など、秋の月は格段に明るいものとなり、（中略）『拾遺集』では、月歌はいっそう秋部に集中するようになり、月を見るなら秋だ、という観念が定着したことを窺わせる。『新勅撰集』に藤原定家が自撰した、「天の原思へば変はる色もなし秋こそ月の光なりけれ」（秋上・二五六）は、秋こそが月を輝かせるといふ、秋の月の歌の本意をつきつめたような一首である。

歌語としての「秋の月」はまず景としての役割が第一である。しかし、秋の月の鮮やかに光り輝くさまは、やはり象徴としても展開する。

延喜御時、八月十五夜藏人所の男ども月の宴し侍けるに
藤原経臣
こ、にだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひやられるれ

（拾遺集・秋・一七五）

秋の月の強い光は宮中を照らし、天皇の権威とも結びつく。「秋の月」によそえられる女君は、単に輝くような美しさを言うに留まらず、帝の権威と響き合うもの、あるいは宮中を外側から照らしてしまうような危険な光を湛えているのではないだろうか。

狭衣大将と源氏の宮をめぐっても、秋の月は特別な意味を持つ。巻四、狭衣大将は天照神の託宣によつて帝位に即き、狭衣帝となるが、結ばれることのない帝と齋院となつた二人の間で秋の月をめぐる贈答が交わされる。

月のいと明き夜、端つ方におはしますに、隈なうさし入たるを御覧するにも、かの、「夜な夜な袖に」と、の給はせし御けはひ、まづ思し出られさせ給て、いみじう恋しう思へさせ給に、さやかなりつる月影も、やがてかき曇る、御覽せさせ給て、いとど心も空になりぬ。

恋ひて泣く涙にくもる月影は宿る袖もや濡るる顔なる（中略）

人づてに聞えさせ給はんも、あるまじき事なれば、
あはれ添ふ秋の月影袖馴れておほかたとのみながめ

やはする

(四三三)

宮中と神域に隔てられた二人を共通に照らすものとして秋の月は詠まれていくが、狭衣帝が王権の座に着き、それを支える神域に妹として源氏の宮がいるという構図は興味深い。二人が眺める秋の月は、互いの光なのである。

「大津の王子」の心を慰めた「秋の月」は、王子の姉妹であり、また神域にある女性であろう。そして「秋の月」によそえられる権威も有している。しかし、「王子」はやはり帝位にはない者の称であつて、狭衣帝と源氏の宮のような一対になれた可能性は低い。立ち上がってくる物語はむしろ、歴史上の大津皇子が辿つたのと同様の、王権への挑戦と敗北だろう。二重の禁忌を越えて「秋の月」に慰められた王子は、それでもやはり王権を手に入れることはない。むしろ、禁忌を越えることのできなかった狭衣が、王権を手にして、手に入らなかった妹とともに秋の月として輝き合うのである。

おわりに

散逸物語である「大津の王子」と、『狭衣物語』狭衣大将と源氏の宮との恋を結び合わせながら論じた。狭衣大将は、大津の王子が選んだであろう禁忌侵犯の道ではなく、侵犯しないことで王権へと辿り着く物語を生きたのである。

大津皇子は、平安時代においても決して忘れられた人物ではない。『懐風藻』や『古今和歌集』真名序が優れた皇子の姿を伝えている。だが、仮名文学として、恋物語の中の大津皇子が伝えられた時、そのヒロインが大伯皇女であるとすれば、それ

は古いがゆえに新しい物語を築いたといえる。『狭衣物語』はまた、禁忌はそのままに神と共闘することで王権の側へ身を置く結末に至つた。『伊勢物語』狩の使章段は、確かに斎宮侵犯の物語ではあるが、この侵犯はただ行われたのみで、禁忌が禁忌であることそのものへの挑戦にはなり得なかった。だが、「大津の王子」で、妹であり、神域にあつた「秋の月」は王子を受け入れてともに侵犯の道を歩んだことが想定できる。狩の使章段では、二人の逢瀬は一夜限りのもので、男が一人尾張国へと向かうことで関係は終わる。しかし、王子と秋の月が妹背といえるような関係であるとすれば、その関係がたとえ一夜だとしても、そのまま終わることはない。『篁物語』は女の死を描き、狭穂彦や軽皇子は王権を追われて世を去つた。どのような結末であるにせよ、それは弟の死に対して何もできなかった悲しみを詠む大伯皇女の一連の作歌とは異なる道を示しているのではないだろうか。こうして検討してみると、「大津の王子」の物語は、大津皇子ではなく、大伯皇女のためにこそあつたように思われてくる。

妹背と神域とは、重要な禁忌の物語を築いてきたモチーフである。これらの禁忌は死と隣り合わせのものであり、乗り越えるには女の応答が不可欠だった。大伯皇女は、『万葉集』において大津皇子を恋う歌を詠みはするが、その返歌はなく、声は届いていないのかもしれない。「大津の王子」の「秋の月」が、物語の中で王子を慰めることができたのであれば、大伯皇女の届かなかつた声が時を経て届けられたといえよう。

『狭衣物語』は賀茂神をはじめとして、神々の声を描く。そ

の中に、天照神の声を朝廷に届ける齋宮も登場する。この背景には、長元四年の託宣事件があり、伊勢に大人しく過ごしてきた齋宮たちの躍動が見られるのが、平安後期物語の時代である。この躍動の中で、王権に向かつて、あるいは執着する近親に向かつて呼びかける齋宮として、大伯皇女が焦点化されたのではないか。冒頭で掲げた『死者の書』と同様に、大津皇子を愛した女性たちやその物語を読む人々の期待の中に、「大津の王子」の物語は立ち現れたと見て、本稿を閉じたい。

※『日本書紀』『古事記』『伊勢物語』『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）によった。『懐風藻』の本文は日本古典文学大系（岩波書店）（以下、旧大系）によったが、旧字体は新字体に改め、また江口孝夫『全訳注懐風藻』（講談社）や辰巳正明『懐風藻全注釈』（笠間書院）によつて改めた。『狭衣物語』の引用は旧大系により、旧字体および踊り字は私に改めた。ふりがなを附した部分は、『浜松中納言物語』の引用は旧大系により、旧字体および踊り字は私に改めた。ふりがなを附した部分は、底本（国会図書館蔵藤原芳野旧蔵本）では仮名書きである。『篁物語』の引用は旧大系、和歌の引用は『新編国歌大観』によつたが、『万葉集』については表記を私に改めている。

注(1) 中公文庫、一九七四。

(2) 石川郎女について論じる紙幅はないが、『万葉集』巻二、大伯皇女の二〇五、二〇六番歌に続いて石川郎女と大津皇

子の贈答、草壁皇子と石川女郎（郎女と同一人物と解したい）二〇七から二〇八番歌が続く構成は、不自然なほど我々に物語を「読ませる」ものである。

(3) 都倉義孝「大津皇子とその周辺」（『萬葉集講座第五巻』有精堂 一九七三）、千葉宣枝「大津皇子歌物語」（『米沢国語国文』一〇 一九八三・九）、多田一臣「大津皇子物語をめぐる」（『古代国家の文学』三 弥井書店 一九八八）、土佐朋子「巻八大津皇子歌の表現」（『古代研究』三八号 二〇〇五・二）など、大津皇子をめぐる一連の歌や詩から広く「大津皇子物語」を探ろうとする論考は多い。

(4) 校異①蓮空本「おほく」、竹田本「おほへ」、為家本・為明本「大津の皇子の大納言の心の内」。校異②諸本「秋の月」、新編全集（深川本）は「神の月」をあて、神事の月の間は、大津皇子の存在が狭衣の心を慰めたと訳す。旧大系（内閣文庫本）では「神の調」として解する。

(5) その他、丹鶴本「おほくのわうし」、東北大本「おほくのわりし」。底本は「おほえ」となっているが、院政期の『五代集歌枕』二八一に大伯皇女の歌の載録があり、左注に「移葬大伴皇子於葛城二上山之時、大来皇子哀歌」と呼称について大きな混乱がある。同じく謀反を起こした大伴（Ⅱ友皇子との混同も興味深い）、「大来皇子、大来皇女」として呼称的にも一対となる理解があつた可能性が見えることを特に指摘しておきたい。

(6) 石川徹（松村博司・石川徹校註、日本古典全書『狭衣物語』補註）。なお、『和歌色葉集』（寛文版本）に「大津のわれ」という物語名が見えるが、松尾聡「日本古典文学大辞典」は「散逸物語」項で後世の増補とする。

(7) 「源氏物語」と〈大津皇子物語〉(『文芸研究』一二六一九一九一)。

(8) 吉野姫の美しさの質については稿を改めて考えたいが、姉である唐后には「光」を用いた表現が多く用いられている。異なる美しさと評されるが(唐国の後はやがて御光にはあらず)巻五 四三五など、今後、東宮妃として時めく姿を想定すれば、唐后と同様の王権の隣で輝く未来を予見することもできるのではないか。なお、秋に限定せず「月」に託して評される女君としては「源氏物語」臘月夜や『いはでしのぶ』一品宮がある。特に一品宮の美は王権の光として認識される。三田村雅子「いはでしのぶの物語」(三谷栄一編『体系物語語文学史 第四巻』有精堂一九八九)参照。

(9) 「ただ双葉より、露の隔てなくて、生ひ立ち給へるに、親達を始めたてまつりて、よそ人も、御門・東宮なども、一つ妹背と思し掟て給へるに、「われは我」と、かかる心のつき初めて」(巻一 三〇)。

(10) 先掲の『浜松中納言物語』は「おほえの皇子のむすめの王女」としている。誤写の可能性もあるが、「おほえの皇子」は「大兄皇子」すなわち天智天皇を当てる可能性があろう。何らかの物語的な組み替えが起きて大伯皇女が天智天皇の娘、大津皇子が天武天皇の子という従姉弟間の恋となったことも想定してみたい。

(11) なお、源氏の宮もまた神の存在を強く意識している。狹衣大将によって迫られる際に神に助けを乞うことで救われるのは、渡御の場面で複数回描かれている。狹衣大将と賀茂神との関係ははっきりしないが、源氏の宮は明らかに賀

茂神の庇護下にある。

(12) 「庚午に、皇子大津を詔語田の舎に賜死む。時に年二十四なり。妃皇女山辺、被髪し徒跣にして、奔赴きて殉る。見る者皆歎歎く。」(『日本書紀』巻第三〇 持統天皇③四七五)。

(13) 注2。このほか「懐風藻」は大津皇子について、「時有新羅僧行心。解天文卜筮。詔皇子曰。太子骨法。不是人臣之相。以此久下位。恐不全身。因進逆謀。迷此註誤。遂凶不軌。嗚呼惜哉。蘊彼良才。不以忠孝保身。近此奸豎。卒以戮辱自終。古人慎交遊之意。固以深哉。」と、新羅僧の嘘によって短命で終わったことを嘆く。大津皇子の謀反の物語は幾重にも可能性が広がっている。

(14) 「四年の秋九月の丙戌の朔にして戊申に、皇后の母兄狹穗彦王、謀反りて社稷を危めむと欲ふ。因りて皇后の燕居ましますを伺ひて、語りて曰く、「汝、兄と夫と孰か愛しき」といふ。是に皇后、問へる意趣を知らずして、輒ち対て曰く、「兄を愛しき」といふ。」(『日本書紀』巻第六 垂仁天皇①三〇七)。兄を選んだ皇后は、結局天皇を殺すこともできずに兄とともに死を選ぶ。

(15) 「二十三年の春三月の甲午の朔にして庚子に、木梨輕皇子を立てて太子としたまふ。容姿佳麗しくして、見る者自づからに感づ。同母妹輕大娘皇女、亦艶妙なり。太子、恒に大娘皇女に合せむと念し、罪有らむことを畏りて、黙したまふ。然るに、感情既に盛にして、殆に死するに至りまさむとす。爰に以為さく、「徒空に死せむよりは、罪有り」と雖も、何ぞ忍ぶること得むや」とおもほし、遂に窃に通け、即ち悒悒少しく息みたまふ。」(『日本書紀』巻第

一三 允恭天皇②(一二五)。軽皇子は皇太子であったために、近親相姦の罪で追いやられたのは軽大娘の方であったが、結局、人臣の信頼を失って死ぬことになる。『古事記』では軽皇子の死に軽大娘も殉ずる。

(16) 『浜松中納言物語』の吉野姫も、中納言によって妹として迎え取られる。近すぎる婚姻が忌避される傾向にある中で、「兄妹」という規定は彼らを束縛するものであった。

(17) 「かくて、あて宮春宮に参り給ふこと、十月五日と定まりぬ。聞こえ給ふ人々、惑ひ給ふこと限りなし。その中にも、源宰相、御兄の侍従は、伏し沈みて、「ただ死ぬべし」と惑ひ焦られて、いみじう悲しきことも書き連ねて、日々に書き尽くし聞こえ給へり。御返りなし。」(あて宮三三三)。あて宮は死を訴えかける兄に対しても返歌が少ない。

(18) 「一つ心なる人に向ひたる心地して、目とどまる所に、忍びもあへで、「これは、いかが御覧する」とて、さしよせ給ふままだに、／よしさらば昔の跡を尋ね見よ我のみ迷ふ恋の道かは」と言ひやらす、涙のほろほるとこぼるるをだに、「怪し」と、おぼすに、御手をとらへて、袖のしがらみ塚きやらぬ気色なるを、宮、いと恐ろしうなり給て、(中略)宮は、いとあさましきに動かれ給はず、同じ様にて伏し給へるを、」(巻一 五五―五七)。源氏の宮は、狭衣大將の訴えかけに困惑し、伏してしまふ。二人の間に十分な交流が描かれるようになるのは、狭衣即位以後といえよう。(19) 『篁物語』の成立については諸説ある。成立がいつであるにせよ、異母兄妹の恋さえ禁忌とされていた時期であることは確かだろう。遠藤嘉基『篁物語』解説(『日本古典

文学大系」七七)、久保崇明編『篁物語・校本及び総索引』(『笠間索引叢刊』二)、石原昭平・根本敏三・津本信博『篁物語新講』(『武蔵野注釈叢書』)等参照した。

(20) 戯れのまま終わる例としては、「源氏物語」絵角巻で勾宮が姉女一の宮に「若草のねみむものとは思はねどむすばほれたる心地こそすれ」の歌を詠みかけ、対する女一の宮が「うたてあやしと思せば、ものものたまはず」(⑤三〇五)と反応する場面が挙げられる。勾宮が引く『伊勢物語』四十九段は、「むかし、男、妹のいとをかしげなるを見をりて、／うら若み寝よげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ」と聞こえけり。返し、／初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな」と女の返歌があるが、その先は語られない。

(21) 妹の死後、二人は「泣き流す涙の上にありしにもさらぬあはの山かへる(ママ)」、「常に寄るしはばかりは泡なればついに溶けなんことぞ悲しき」と贈答を交わす。

(22) 大伯皇女と大津皇子との関係については、様々な論考がある。多田一臣『万葉集全解』二〇〇九「勅許なく伊勢神宮に赴くことは禁じられていた。題詞の「窃」は、集中、多く密通などに使用。こども、禁忌の冒しを意識する。」、柳本紗由美『万葉集』における「大津皇子物語」―二つの「竊」をめぐる―(『玉藻』四七号)「竊」字に男女の関係をあらわす語が下接してはじめて密通の意味が生じるということである。よって①歌大伯皇女歌題詞竊は、密通や近親相姦が行われたことに対しての「竊」ではないということになる。など。大津皇子・大伯皇女の姉弟恋という禁忌は、「竊」を過剰に読み解いていけば窺えるが、

表現上は否定される可能性を持つ。あくまで読み取れるという範囲に留まる語である。だが、現在の我々が読み取る以上、同様の享受があったこともまた考えられる。

- (23) 斎宮の密通については、歴史上確かな例は多くない。むしろ『大鏡』や『栄花物語』が語る当子内親王の密通のように、斎宮経験者が退任後に引き合いに出される例の方が広く知られている。

- (24) 斎宮と密通の歴史については、拙稿「古代日本における祭祀と王権―斎宮制度の展開と王権」(『アジア遊学 東アジアの王権と宗教』勉誠出版 二〇一二年) 参照。

- (25) 『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店)。「秋の月」の歌語としての検討については、紙幅の都合上簡単にまとめた。

- (26) 本稿では扱えなかったが、『伊勢物語』狩の使章段が描く業平と斎宮の関係は、その裏側に惟喬親王と妹の恋になる可能性を秘めているのではないか。皇子が斎宮と結びつく可能性については、拙稿『伊勢物語』狩の使章段と日本武尊―「斎宮と密通」のモチーフをめぐる―(『古世中世文学論考』第二四集 新典社 二〇一〇) 参照。

- (27) 拙稿「狭衣物語の(斎王)」(『狭衣物語空間／移動』翰林書房 二〇一二年) 参照。

※本稿は平成二十六年科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。